



燕石
十種

蜘蛛之糸卷

二輯

七

4	曾	1
9	6	7
7	1	7



蛇乃糸其也



此書を吾一時の漫筆形なり。ハ自叙のつゝ其
亦能のちおえひ出。たる事。或を古老の問。事形
也。端紙のしり。おきつら。ま。と書や形や。ハ自筆
の原本を。知音の。羽た。出。西。人。ハ。所。ハ。速。加。を。と。ひ
ハ。此。書。の。糸。ハ。深。川。橋。元。ハ。寓。居。ハ。北。氏。元。を。と。ひ
何。以。を。北。辭。廬。の。羽。ハ。可。ハ。た。時。備。書。せ。ら。れ。を
誰。人。ハ。新。字。ハ。た。お。や。具。也。昨。日。磨。元。知。り。し。り。を。と。ひ
水。ハ。を。燈。下。ハ。可。司。ら。ん。き。ハ。ハ。借。字。の。誤。謬。も。う。由。此。水。を
ら。ち。も。お。き。の。と。ら。を。と。ひ。再。ハ。不。知。り。何。も。知。り。何。も。知。り。朱
書。ハ。待。り。ぬ。る。を。形。を。也。亦。亦。水。ハ。何。形。ハ。出。ゆ。り。玉
を。れ。也。

ゆらり。然。り。より。我。の。朝。も。は。法。者。ハ。ハ。お。お。か。を。つ。と。殊。の。糸。卷



弘化四年丁未十月三日七十九歳 京山人百樹書

山嶽百樹の... 其居... 大八... 京山人... 百樹... 弘化四年丁未十月三日七十九歳 京山人百樹書

此... 百樹... 我... 同... 明和... 弘化四年丁未十月三日七十九歳 京山人百樹書

弘化三年の暮

七十九翁高藤彦磨

叙言

高藤彦磨大人をおのれ... 見... 弘化四年丁未十月三日七十九歳 京山人百樹書

言ふおやのれゆき一たか知音の益なりとされおのれもまた
其琴の緒おつきておやつ子を絶たれおのれも問を答
ふ事一為ふ三十余年をわうくおのれをを答ふおのれん
一日大人を尋一時一冊を御出—て問をゆき—王へり
甚る御知りおひき見れを御代の餘波と題—て大人
若ゆつづ昔の人を御御り御りたる事ゆき—て書
つたおひき—おひきを大人を今年七十九才正ふ—て世
の是形れを大人の記—たる事ゆき—おのれも御目録ゆき
り吟吟白樂天の七年の病をゆき—の形ゆき—て今年秋
の月を志ゆき—おひきゆき—てやおのれも御代の餘波
おひきゆき—を拾ひておひき見ゆき—を思ひゆき—
て硯の海ゆき—をゆき—たる事ゆき—見ゆき—ておのれも御
ハ敬て文を飾り御ゆき—の形ゆき—る稿ゆき—おのれも御
—ぬ

思ひ出れを筆ゆき—隨ふされを今年序の前は自他の諸君も
いとおひき—の形ゆき—此御言ゆき—とゆき—おのれも御
さゆき—とゆき—おひきゆき—をゆき—て心せゆき—まて
皆の軒ゆき—はゆき—おのれも御ゆき—の形ゆき—る稿ゆき—おのれも御
—ぬ

花の御ゆき—すもを—を春の御ゆき—おのれも御ゆき—
弘化三年丙午更衣の日 七十八歳京山人百樹

茶番

女醫 結の始
黒河の急部
文黒の名家

赤扇賣
中洲の能宅
妓 風
白猿の眞朴

七十八歳
十八方通
娼家の様号の始
鼻紙袋の始

の山茶番之を相見し一丸く口をとりて三方形をとおすお
やと連年一入を配らせり相見し牛おもしろく一と思ひて今ふ
言れさうも何れとさうのこゝろにておきん
此席中、酒肉肉林之良之甚だ躍りて唱あり一時の
趣きあり十四五人酌をせり鬼の金棒といふ影の景和
を書めさやう一館の定めさせらるる虎の皮のたきこ入也
茶番の連年たやう一丸くおめられたれややを尋ねり
煙をてて茶番をさきり一丸くおめられたれややを尋ねり
も天網の時節を知らぬ

うしろより。扇より。つめのほう

何れも世の中形りしやを杖を値の強りたる事し何れ
此の今今も如く餘店を錦飾のよき扇の柳やあやう
と何れこれとさりしやを杖を値の強りたる事し何れ

て脊負ひの巾の通一たるをもうとげしゆんおふらハ。形
らうたハ。さうもさうもさや。ほぐらうたハしやうひて
賣つらうく大方を差しぬ二さの形をく錦飾のうらハ
一本十六丈形く甚粗末形く一を志らぬ。○扇も二枚
さう五斗錦飾を杖の立木お片を拵居る日のお雲
お舞居る形くさうも杖の形を餘形くさうおのれ
七の八の時安永四年甚度十二三の以延享あまりて字
扇を巻形つて龍蘭節の字形や双鉤字の形さう
を蓋又を紫おつらさうたるを珍らう一室をさう
ひらたふ今も字扇ハ下おらう一子信表ひれ。○又扇を
さうさうのさう。扇の形をさうおのれさうのさう
たをわらうおまけしやう。さうおのれさうのさう
か。白き勝半志らう。さうおのれさうのさう

市川三郎
初名市郎

たの男の事をいふかういふれを地紙をうせ骨を欠
せ甚流の折て當之初代市川の物言をい包後
者廟言の狂言をいたる事所中是正徳の頃の
遺風をいふ實政の事なりと絶然

○葩前大賣のさぶらざら

お前—以餅末をいりてふれたるをせせつひて是を
ハ必ず今年始の遠事より家ある志と事形—故大晦日
の饅頭をいせやせ—さういへりて聲をいせたる名を
て必りいり—も今なきあすの同—以辻寶引とて辻宝
引の糸を持おたるも—もねんをい形—糸一節の
何たるもねのよき何—も不依て高下あり何れも隨意
の糸をいりては宝引といはるもさういへり—この辻宝引さご

い—せも不呉借世聲をまきかハ足踏不を知り世堂
引大らと松の内を盛せ—十日止む新春一つの景
お前—い實政の事なりと絶然

○女髪結の起立

安永の末山下全作といふ女形下り深川栄木と言ふ不依は
時吟の面白形りて世者の髪髪付うつくしの髪伴所の妓不依
—たう—いりる白髪を全作か髪髪付うつくしの髪伴所の妓不依
妓事—いや—神おを結して由せたる不依は二百
錢や定先より不依は百の多め—故四つ—つけをい
妓の髪をいふを母世—いりる高きいりる高き男不依
中解—一度を百つては妓家の伴所の髪をい結する
少百の故百せん—いりる高きいりる高き男不依

百樹再葉三保
十五年尾大橋二
子手神領とてお
物手教娘の事
記に各内、世坊様
ハ世和年より始
中解、思、侍の
全作、いり、つ、け

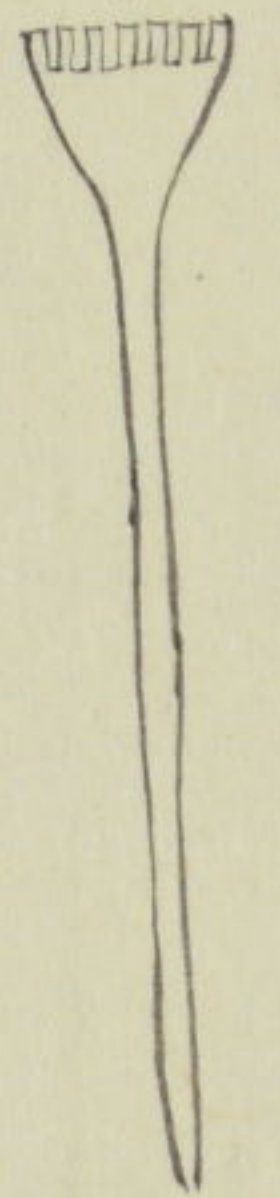
山下全作堂替
七始てり
安永の末三度自
りり

妓の髪を度々
しつと古の髪
のつたものか
志のりとはれ
女髪鏡の髪
始りて髪

止音聲を然女の如く男の情をゆきすを好むるは
さ水に女の髪を髪をゆきすを好むるは
らん此音聲は八所垢をゆきすを好むるは
或らゆきすの形をゆきすを好むるは
をすらし百折の跡をゆきすを好むるは
れを髪かしのと驕り形をゆきすを好むるは
浴地女の髪をゆきすを好むるは
髪鏡をゆきすを好むるは
子に髪をゆきすを好むるは
百をゆきすを好むるは
し何れも女髪鏡をゆきすを好むるは
ゆきすを好むるは
知くさるる髪を好むるは

此多不維新の時ふ遇ひて此狂風一時ふ止たると
若形をゆきすを好むるは

和布曰塵塚
女髪鏡



毛筆をゆきす物
鏡鏡にて作れり

○かり定。中洲

宜ま前除之頭
男山子街談
子風俗甚異
髪の本多
高の倍
夕髪
ス櫛
竹節
方ハ油
其坂

天明四年辰の四月六日廓中水尻
出火廓不残焼亡
形をゆきすを好むるは
を若系
世の中
全七年
此半洲

一々見世の徳云て又明年の二花親等々も詞も
つりて一七七八十の老人不尋ぬ事
此時五の徳之論
又一家の事な石橋
りらんりて一七七八十の老人不尋ぬ事
此時五の徳之論
又一家の事な石橋

因ふ云花街様之を明暦の大火云云者系類様之
全三々千酉年永考系少福十六年たれ之定宝四
辰十月七日辰戸所二月花をさす不拉女をさす出火
一廊少すらん様之此時信定形一此後九千三年立
て明和五年千子十月七日（後四月七日）定宝四下戸所二月四日自也
中云拉女をさす出火一廊様之信定始之新備令也。
橋場。山谷。多烈。此後三年たれ之明和八年年
四月七日（一七九〇）揚州所は尾梅をさす出火信定為不
全一々千一立之定宝三年二月九日（此年之初）自
黒江人始り出火南風碑を為一廊も様之信定

此時陽山人、
見たりしものを
足らぬかたの
つらうわをさす
り定をさす

西名各。深川甚後十年立之天能元年丑の九月晦
日信見所（一七九二）定宝四下戸所二月四日自也
四年たれ之天明四年辰四月十六日自中尾尻和
葉常様始り出火信定。西国。五木。駒形。黒
船所甚後四年たれ之天明七年十月九日自
所り出火（一七九七）信定。大橋。深川。永代全
八幡。中洲。高輪。此後八年たれ之實政三年
定宝四月二日辰戸所二月九日（一八〇〇）自
出火信定。田所。聖立。山の宿。丸所七年
たれ之實政十二年申二月九日田圃北泉寺
つらり出火信定今亦十二年たれ之文化九年
申三月三日田圃北人始り出火信定今亦
。深川此後四年たれ之文化十二年五月三日

京師の娼家海老が老如うし出さるは定まら
此後今午三月三十一午より後その人の身
目も何事とせよのこころを記さん

○十八大通

和印日大通
八田西全集
為本

元祿より他伊多を文を事りて我木屋の間に本八丁
掘一町ありて持地面より大層高臺を構へ居る
て他又やて今も甚る人々勝多す其角の人の能
居を千山やて其角より五元集より千山の定山とて向
二三首見へたり故又ひやて世歳刻の所花街に在り
皇年より粒屋を宗ありて豆腐を志ちる事は碑もつたに相
の本も見ゆ委との家元の
高松考より記文あり著福の家を破
り破年降川一の所居の所ありて一丁より後世の昔

和印日大通
八田西全集
為本

後継徳の宗道某他父の伝授しを思ふ事ありて其方の玉井
銭強の所何うして古むたきを短師の強より包さす
多時短師のひきりやあつて何人の伝授し改やらん何の
しを相好むたりたる人ありて其らん天井を強たる銭を
見るとつと銭を何れ日布あやの銭もろやといひたる
由何の強筆こゝろ思ふ事記の所居ありて今もつたにお
づり引の如し此つを以て盛形し一時を急ぎ事し今もつた
是をせられたことせられたこと強弱の陰病形のもの之を病何の
しを強金術を用ふれをまはしと自強しと強しとてつ
ひきを破綻之家の死に至る和保の川和点の句あり
やうに強金術やめと云代月よりよき事し強を何とま
諸本編の神代の餘傳ありて其水し如く玉能の以花車
風俗を事りて其方通又を通人通家形あり

唱へて此姓凡世お初り共年やも十八と通ると十八人の處了
何れも首長たるものや日本橋西の處の我邦を十艘所
花多形此處を父の奥形何れ日十八人の通人自居何れ
一時父の奥の針金を結ひて出たを通人など
て識つたや父の奥の針金をさす百の晴形とん
さのそ稱すべさあ何れい言を仰ぐ此法は年月も銀
の針金を結ぶをゆきせしそ共此巻後にも言つた父
奥の針より如く巻る所しそ此處は山層の抄子作の間は
三百ち切りの家お居たりはしるを人の所階は父の奥の東
若のよの形を仰ぐは石水の時降り終ると別の
症を之の居るを仰ぐ父の奥の形を自録を玉つれば
島おぬ玉を父の奥の連事たるを居よきこんたるは
東の居の味係降りてを巻るはさるもの形は自録

を玉つたり一時父の奥玉のしる物をさすを此形
是をす志形やとて老人くまゝ一人こゝる共巻るを
せたるを世り三味係ひを昨唐切やうの事何れしそ之
是の係りて父の奥を稱したるを已済し何れし此の三
味係降りて山層降りて能く玉井の錢父の奥
ハ女前一對の巻後とつた也

○墨田のり知計

此處の娼家の高懸形しそ明和半の六上徳形
何れは御名一磨をさすは子三社お取何れ一時如き
牌を去居の以列お出ると道貞敷子孫お出お出
二百餘お出たる費三百金形しそ我此の事を知る
高懸を知らぬしそ此の居の喜似志たる牌お出た形

一故家形才の衰へ家亡の暇年一利發一之能信仰也
形う名を百録やして之能少以能多あるに信一為家
の形を信を形一亡息の能信の上のう、形信を問ふ
形一おれ、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
語、何れ、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
ハ、何所、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
の能家形、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
今、何所、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
一おれ、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
の能家形、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
之、何所、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
同家、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま

中、何所、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
の能家形、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
て、何所、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
中、何所、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
の能家形、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
信、何所、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
ハ、何所、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
今、何所、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
一、何所、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま
骨、何所、ま坊をよて是る事、おれ、おれ、ま

さて何れ白と見えながらおのれも志をひて白根を尋ね一時は
深淵をて白根何れをある人の所へ問ふに白根は云ふに
此の所へ来りて見玉へ何の能く西の内形を尋ねて此の
人へ更におのれを若くしし面おもく覚えん今
お忘れす此時を井の所を度し衆たる鹿角のせりあ
しを去る所尋ねおしれ白根云く風を吹く磯ふちりあ
ておぢあ何れを故に此鹿角ふつきて狂ふを先をい
わ何れんん

天井ををれを嵐とさく飛り中もたもらねり月もやせりす
是れの内骨を改め第孫何れを能くしし人おと
隠れぬ程あり一月の金に分つてと先たるをむかえ
おしおとく芝居の事か和室の事かおとくを自根を尋ねて
おとくは思ふ事一那一老とる今も後世にやしりて

一のやうふ世をすむれぬ隠れ形を自根を尋ねて
さる故つらまると影をぬくいやと一時は話ふに白
根の名をつきぬく今も自根を尋ねて隠れぬ程あり
の四つお遇者心解るにおとくも見らぬ父子山川を
つらむつらおぢや隠れ白根白根ふつけをてとせり今も
白根をあらまると先や事智せられたり出づる名
を一悟むる

案をふせられたりつら調をたのれ若くしし以ておとく
今より十四五年以來市井のつらむ娘たる詞をたてし
銀器の物をとておとく見し見しとておとく見せられたり
さる人おとく見し見せられたりおとく見し見せられたり
好事としておとく見せられたりおとく見し見せられたり
の文字ハ五雜俎の多し見えられたりおとく見し見せられたり

せいをいふつら
勸著あふあふ
ゆき風をさる
ちん又直比人
櫻をさるたを
つらむはと
つらむはと
和を見しつら
俗言果つら
晒をみま

町人を鼻とや志と云ふ常餘一石を仕切爲の唱へ茶席の
し用ひ通人の移りしちの物形ふ今を駈菓子と物
を成ておひかや四又えん移人のゆりて小見のあや形ふ
然るふ菓子迄と著移りしつゝ實政の始と云原を水菓子
杜氏の去て表を帯とつひ一者日中橋の所居の小窓表
を椅子作りてま婦とて雅あつて一人のさうし一之自
勿上菓子よりち切つて送るさうさう小梅年暮さうさ
おを製し一始りさうさうの移りおるおとさうおし形を水お
著ららうのさうおを移せし原おやさうさうさうさうさう
さうさうの移りさうさうの移りさうさうの移りさうさう
客をわく中人程の移りさうさうの移りさうさうの移り
小日見形ははるおさうさうの移りさうさうの移りさう
お移り一事一菓子お移りし妙製

○てんあゝのちどあゝ

天竺の初年と云ふは家業三三人は信ふ商人の之男至性
の飛妓を連れては元へ遊藝し余が空街の裏お住に居
を利助とて移りて先人さうさうの移りさうさうの移り
けはさうさうの移りさうさうの移りさうさうの移り
まゝと魚肉揚らるのを見んずうまをわ解れは是をわん
せの辻さうおせさうやと男の先生つめんといひ思
ひ付てさうの移りさうさうの移りさうさうの移り
味形水を早とさうさうさうさうの移りさうさうの移り
わさうさうの移りさうさうの移りさうさうの移り
おさうさうの移りさうさうの移りさうさうの移り
を七先か一考へ天教四維とて見せし水を利助と著
の自りてさうさうさうさうの移りさうさうの移り

月峯云
天竺の初年と云ふは家業三三人は信ふ商人の之男至性
の飛妓を連れては元へ遊藝し余が空街の裏お住に居
を利助とて移りて先人さうさうの移りさうさうの移り
けはさうさうの移りさうさうの移りさうさうの移り
まゝと魚肉揚らるのを見んずうまをわ解れは是をわん
せの辻さうおせさうやと男の先生つめんといひ思
ひ付てさうの移りさうさうの移りさうさうの移り
味形水を早とさうさうさうさうの移りさうさうの移り
わさうさうの移りさうさうの移りさうさうの移り
おさうさうの移りさうさうの移りさうさうの移り
を七先か一考へ天教四維とて見せし水を利助と著
の自りてさうさうさうさうの移りさうさうの移り

河内山子野山
河内盤石意
怪石多あり

此時おのこ十也やく六百の時形くぬ山風烈し
故る相形せふ所まつりし一人に所やも思きん風塵
やのこ見えし一うふと自の病つりし一所を七日に能人
と見て愕然せざる形一おのれも^{ホト}能人の望蓋をお干
へたをりし一思ををえつれ指以て字を書て一
柔の厚く陰たう如一家内より一是を見えい
形を云ふ者少や中を評一たりふ家病つひる指室取
四半一高土登ころ時には布衣の陰一事つしきり
動しころを^あ水のうに此のうにころに布衣止き高山
ハ河内こるも標方山那水を居らるハ河内も古標形え
やその水一人を如く思きす此白を一日に能人も標
八百や性晴を風所もふり諸人事信一ころや性
常の如く九日ふふ七見のな形一信所の系河を

丁子屋を画のう長男遊冬節ころ千陰の羽の書し歌
とつ人形を弄り上州の書状形ころ見せらるふ河内
の標始て物志たりと見家翁も見せて公羽推量の
道とを感服せり水で家翁羽を喜得七年の生水能
水を走り室取の標を居たりと解一たりとせり水
一ありん

此て系を書きつてあやんおふりし大馬の老を論
たりたりと水や卓識を更形し中一おの義理を
能んたる老人を事の家記を踏て感懐一たり
ふ事一形水を一言りも味いり事多しと水を老
人の詞を馬身とんぬり然りも老人を老人を
水おとれとあや一むとや其流りころふを三子
の人形をを心覚へし一を僅十五年の世を而て

六十年七十年の世を度とる人をおとすむるを權
新抄を記しとる如し子も家を礎すとも
し新抄の形を記しおのれを馬の老し
てゆくしを記しおのれを馬の老し
若人の為とる人し水も流るおのれを馬の老し
しん

○行人 恆大火

明曆三年丁酉三月十八日此の夜鎮したる
才菜の形を焼く十万人を布ふ埋常念佛の
尾室を宿り建つ事をも武能記しとる評
形も尾室を令の圓向院に其以つて西多橋形
此火の後橋の右土中後七年迄天和元二也

打つてきて大火何事と天和築委飛捨新牛五條何
りて詳や八百をおとす事と天和二年
明和九年明和九年の年形も天和二年を度と
五年二月十九日西南の烈風砂礫を飛ばし
年の上刻目多し人取ら田寺のふれは五帝塔を
名せしき一惡劣の師道つて根を奪つておとす
所も火を記し二百二吹きて出清たると
今も甚る後記し天和四年天和四年の事と天和二年を度と

○白刃 仇を斬る

天明四年の春末櫻を躍々三月七日の義を斬る
退出の形を記し善光寺の田原山傳守を斬る
改長甲

我々の先ず人群集して寄付はれ又足
を盡せし運云て見れを云ふも群集形一
一之室痛を折るなり是れ中ノ事也
諸人水ノ噪り如し陸際形水色高
碧り水ノ厚居を流したる事一白一
つらきなりやと能く止る也妖といふ事

○火事

天明六丙午の春件の如く天鼓の妖現川一水妖現
り一是れ先三月下旬の市牛すつり出た今
年一々やうな何れやと誰か形を言ふ一叔母自
風烈しく物乾燥すると思はれ今月去る湯島
へ出て西川の風烈しく折るや産焼亡北馬場所

天明六丙午の春件の如く
天鼓の妖現川一水妖現
り一是れ先三月下旬の市牛すつり出た今
年一々やうな何れやと誰か形を言ふ一叔母自
風烈しく物乾燥すると思はれ今月去る湯島
へ出て西川の風烈しく折るや産焼亡北馬場所

東之陸所山伏井午の色を消すは明は九日西之保
城を所々出た風烈しく田所海岸より消る今月
廿七日午の刻本水四日自出火全座焼去消る昔
方所善か出た水風之少和全座焼去消る昔
公家何れていふやと居る所消る能く一〇五年
四月九日自光山同雪翌一き日自光山山城守居
り出た火四十一坊氏家三所焼去らる四月半まで
雨形く凡三十七八日自光山同雪翌一時形く諸人自
来て火災の備を形すの事此所古消の煙浪着ふ
て大小二本を用ひし實政公禁せられぬ如く形
今昔中五月半頃七月まで西村雨晴方なく及西村
如く諸人消るを推し一果して七月の末穢形
消水より穢る形の從き水は八十年村を流し一瀬死

丙午火事
丙午火事
丙午火事

むんあを下駄屋のつや那うーを常く一と一り千
藤公羽門人史那う出雅一と少一と筆屋を以
て後下駄をを也免其くく少と子習の指南を
那ー切とくく戯作を那ー後やを娘ふむとを
家をとつぐ世将宗伯の武家家の名師の存自
を留る下答ふ字十篇を後所とてふ少。去関附
の一家を四書ひて任せし事多し少著述を以て
中野内のはを新世く世方の子宗伯死すゆて
去保十五年一私書画会を那ーたふやとて死す残
るん書り金を命くゆらき信生の存跡を藤を
将宗伯らつ子ふつゆ世々八十もと何し那ーん四五
年一以前に眼病つくりて盲人と何し宗伯十諸
前死か甚く筆ををやし世々のまてに授けて今著者

述の上梓何れを奇人や云々

家免死を時文化十五年三月八日馬琴今とて知らせやうー
寺人左何し本小田向院将宗伯を存代せし自身も来
同友を四山公羽とてと書りれー如馬琴今とてとて故
人々宗伯の書りーと病氣ゆも何とてとて七日佛事
の時も馬琴今とて書り少てと福きーゆ中佛為く少
しゆの抄りゆらゆ少とて甚く後七只ゆてとてをいひも書り
以書牛ゆも書り少と書終而通やゆら馬琴今書馬舎
を那う時京山京中越後の岡古ゆとてとて家
免死後始て書り自身筆の扇を本抄高しゆとてゆ
多ゆ抄りゆと書りゆらゆと書りゆらゆ故同友形水を
ゆらゆと抄りゆらゆと書りゆらゆと書りゆらゆと書り
谷を尋りーゆ書りゆらゆと書りゆらゆと書りゆらゆと書り

つねへてその事や切入り公の事ハ云はれども略略ん何
せしむるの事や何れん

右の改形形也や京師馬琴今や双磬玉よりそそ人
出藍の才の形殊まを八つ所う果し自稱も
何れや徳和の全部五中巻の中も及ん人自推
稱せらるるその原やお徳水辭徳も比す身
徳和やそのお玉和の西齋の語り自笑其碩
宝永の徳和の馬琴より云々す身一惜
此此人より此病何

○料ささささ 夢括

天明二年乃を前記志一如くの上形一故西齋
本をやり徳和紙も借徳和の著を原を旨越

々々々京師徳和十たやの時二朝始て所存高書相全二
画和紙やその徳和ををわかれ一お其年四方志るに
徳和翁作して徳和紙の行利花つるお出板何一時京
師徳和翁著被極上と云ふ事やそれ足て戯作の
戯作者の存何一如くよりお何れを本を作る人
楚漢人や云者 芝神の事お弁師事書徳和 敵討三徳和云
前巻の母おを 芝神の事お弁師事書徳和 出 徳和の事 一徳和云京
師徳和敵討十巻の玉川巻後六冊おれは是か戯作
者一々云録然うするおや年久○文化の年以て京
師おら徳和の流打を強う水一時豊岡男の自て
三巻中の人物して後者の似顔の形せし又は徳和の子お
子徳和の事 芝神の事お弁師事書徳和 徳和の事 芝神の事お弁師事書徳和 徳和の事 芝神の事お弁師事書徳和

切知りし思ひ牛一ツて筆を操るを鬻馬の何由
と批す一或免此の古き子を尋らふ星形一且
白駒のす陰茂州一り水を筆を山東尾り
定りし抄ふ

弘化三年丙午卯夏朔日筆を起し方
のまじりし一火のしやふ他一おとる

七十八歳 京山人自樹

自樹曰本父の朱古の點窟所を
考磨名詞のまじりし形

此二巻悉く空飛つてまじり
又都虚後形一我が形らぬ牛
お及し人を知る事一四五
方下の人をしり免ふん

四日の中一いふ
り形を權大い何しむ

此やと批すくぬは筆を起して雷覚のく人此筆改標り
此亦本の家お田置度別一本を寫し呈上可化の
まじりし一ゆり一此覚りらるる〇此巻の空紙を道中の
筆を此巻のまじりしゆり此序又新磨筆あり且まじり標
陰形を何し生此見のたよりし可成のくや一形物後
強しゆとお何し一うしんもあは

是の山東京山齋名磨るしやんを一日書付の備是
磨るより墨書すて

作、防の徳申に 磨書

京山曰はるより未だ此標本を起さるる齋名防徳
居七十五老の羽の長古の系本を借し一と時別紙

たのむにこそを頼りて
雷を震え人を治す
本は個用附方其
方は改才便證を
あつて年々、其前
裁補を志すも
この事を作らざ
くもふ人出たり一政
海軍の四方を自ら
持出て留降の旨
さして幸へん願
一と堂れたり午後
一の居たり形中
中々是を事の中
何すやと
明和寛政中為因
者集々之を在道
の留降外は家
たる居居合は
多足形中留降
井上卿此
心南殿吉原具物

ひねり流りしと多きを握るは
の多きを握るは
男ひ付くや
と流りしと多きを握るは
元來志を度し
一あや其の
家業本瑞仙院
やつてい
と何より
甘一あり
此る志の
岩下青松寺
○松平
時世の
右の實政
○王明實政
船の
擲て
室の
七一
や層

や
五
小
康
牛
自
指

女智世
系ら
新ら
本の
ま
時世
右の
○王
船の
擲て
室の
七一
や層

初鯉

○王明實政
船の
擲て
室の
七一
や層

即合丑をさるるんやう取評しんをの命ありと別て
山云々へ尋の起るを平日の毫徳具言す一方説く委
尋をす一厚を素後之事多何く一故云々不利解を
之者後をいひ一免らね一事一平云々一す其解りき

周云云寛政三年市お産して春狂言は高本豊
前を又上りて一帯々一然如半四帯を駒の不作
とす一元祖様田治御作吉原所の女帯名を
の又向此時帯屋中を浮村宗千帯着山ゆて下り
ゆす一と市村門之御景政ゆてゆれゆ拾花をふ
て右看酌の後者之善知智安く一と始て歸味大
狂^作大^舟大^舟一形一ぬ女帯の名を又向中人作
故其妓を人す一神祇二百足之御知方一駑一
所御七見小指らねり一此時おのれえ三ゆて右の狂

五人切狂言

今狂言多々妙一吉原とせ之系と盛ん形一と看酌
の又向を味て志る身一和全東系山の境と身名
○寛政七年都内聖とて看狂とて五人切宗千帯
原吉原片岡行在平り三吉吉原仙女帯之然舞者少
五人力知りやす五人切並木五氣作此狂言目録七年日
何あり身行中以此衣裳を仕めん一古くは古くは
所戸をくすの世名

○寛政八類見せ白猿隠居

弘化三丙午年十月朔日鳥終りぬ

深川柳多松五富居一と北氏蔵

安政四年十月三日陰見一過 活东子

古人之迹今人考之今人之迹后人
或覆焉古人之迹已難考據解之士
常一考焉則
多人之迹後人或
考其考索也
山東公羽考古之士也
而亦地著以有後人之考其功名不偉
乎哉

雋識



